

変化の激しい社会で 「学び続ける教師」 であるために

ここまでの話から、教師という仕事を持続可能なものにするためには、安心・安全な場づくりと、そうした環境下で行う教育活動の精選などが必要であることが分かった。それらは、教師同士の協働によるものだが、では、教師一人ひとりが生き生きと働き続けるために自身でできることは何だろうか。その1つとして考えられるのが、「学び続ける」ことだ。そこでここでは、教師が学び続けることについて、それを日々心がけ、実践している教師たちによる座談会を通じて考えていく。

教師には、多様な生徒に
寄り添う力が求められる

三浦 中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会』の審議まとめでは、「自らの日々の経験や他者から学ぶといった『現場の経験』を重視したスタイルの学び」や「全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて、

新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすこと」など、教師に求められる新たな学びの姿が述べられています。新学習指導要領の下、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るためには、ICTの活用を始めとした授業づくりのスキルの向上が必要であることは確かです。先生方は、非連続で劇的に変わる社会を生きる生徒を育てる教師として、どの

ような場面で自身の学びの必要性を実感していますか。
佐々木 教師になって14年目になります。生徒の心に火をつけることが難しくなってきたと感じています。かつては、分かりやすい授業で生徒に成功体験を味わってもらえれば、学習意欲を高めることができました。しかし最近、生徒によって心の火のつき方が違ってきていると感じます。部活動

課外活動、探究学習など、校内外の多様な活動が生徒のやる気、火をつけるため、教師は、担当教科の授業だけではなく、様々なことに生徒と一緒にチャレンジし、学ぶことが求められていると思えます。以前、高齢者医療を通じたまちづくりをしたと考えた生徒と、いろいろな施設を訪ね、関係者の話を聞く機会がありました。生徒は、探究学習などを通して未知のこ

東京都・私立
かえつ有明中・高校
佐藤あやか

北海道・
市立札幌藻岩高校
佐々木佑季



ファシリテーター

ノートルダム清心女子大学 非常勤講師
元岡山県立林野高校校長

三浦隆志

岡山県立勝山高校教頭・副校長を経て、玉島商業高校、林野高校で校長を歴任。資質・能力の育成を目指す授業改善やICTの利活用を推進した。経済産業省「未来の教室」教育コーチ、岡山県 ICTPT 委員としても活動。自身が設立した「授業デザイン研究所」代表として現場を歩き、学校改革の支援を続ける。

とに挑戦していたわけですが、そのチャレンジに伴走している時に、自分も学んでいることを実感し、「もっと学びたい」と思いました。

佐藤 私の勤務校は、生徒が自分の興味のあるテーマで主体的に探究を進めるプロジェクト学習に力を入れており、生徒たちはそれぞれ、答えが1つではない問いに日々向き合っています。自身の多様な興味・関心が認められ、学びが深まった時、生徒にとつて学校



北海道・市立札幌藻岩高校
佐々木佑季

ささき・ゆうき
教職歴13年。同校に赴任して5年目。数学科。社会の変化に対応する、探究学習などの新しい学びを校内で深めるため、ベネッセ教育総合研究所主催の「生徒の気づきと学び」を最大化するプロジェクト」などに積極的に参加。学びの機会を校内だけでなく、校外にも広げている。

設立 1973（昭和48）年
形態 単位制／普通科／共学
生徒数 1学年約240人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、小樽商科大、北海道大、北海道教育大、札幌医科大学、札幌医科大学などに91人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、中央大、明治大、同志社大、立命館大などに延べ545人が合格。

は、「自分が生きる場所」になると思います。私たち教師には、生徒の多様性を受け止める力がますます求められていると感じます。

三浦 生徒一人ひとりのキャリア形成を支援するという教師の役割はこれからも変わらないけれども、生徒とともに未知の領域に飛び込み、気づきをつなげていくという役割は、確かにこれからの教師の大きな役割だと思っています。そうした役割を果たすための学び



東京都・私立かえつ有明中・高校
佐藤あやか

さとう・あやか
教職歴8年。同校に赴任して9年目。数学科。すべての学びを生徒主体で進める「高校新クラス」の3年生担任を務める。生徒の興味・関心を広げるきっかけをつくるために、プログラミングを独学で学び、授業に生かすなど、数学の授業の新しい可能性を模索し続けている。

設立 1903（明治36）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約180人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、千葉大、お茶の水女子大、東京工業大、神戸大、東京都立大などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ405人が合格。

校内外のつながりの中で
価値転換を図る

三浦 自分の授業スタイルを転換させるのは、大変なことだったと思います。お一人で決意して、試行錯誤されたのですか。

佐藤 同じ数学科の主任の先生が支えてくれました。私の思いをお話ししたところ、「思い切ってやってみるといいよ」と背中を押してくれましたし、「今日の授業はどうだった？」と、いつも気にかけて話を聞いてくれました。新しいことを実践すると、それだけで満足してしまいがちですが、主任の先生との対話の中で、自分の言葉で振り返ったことで、冷静に授業を見直すことができたと思います。

佐々木 自分の実践を同僚に聞いてもらうことで、客観的に検証することができずし、他者の視点なしには、教師としてのよりよい自己評価もできないと思います。教師としての新しい学びには他者の支援が不可欠であることは、『生徒の気づきと学び』を最大化するプロジェクト（*）を始め

が教師に求められていると思えます。一方で、教科の指導スキルの向上も、ますます求められているのではないのでしょうか。私は、40代半ばの時に、講義形式の授業だけでは生徒の学力を向上させることには限界があり、ましてやその原因が生徒のやる気にあると捉えるのは間違いだと考えるようになりしました。そこで、協働学習について詳しい大学教授に教えを請い、「教え方」だけでなく、「学び方」についても学び始めました。授業においても、目の前の生徒に、教師としての学びを促されてきたように思います。

佐藤 私は、教壇に立ち始めてからしばらくは、生徒に厳しく接して勉強をさせる教師でした。しかし、ある時、私が細かく指示をしないと勉強しない生徒を育てていることに気がきました。それから様々な授業方法を学び、現在は、生徒自身に授業における目標を設定させるとともに、目標達成のためにどのように学ぶのかを考えさせる時間を授業中に増やしてきているところです。

* ベネッセ教育総合研究所が主催する、有志の中学校・高校の教師を対象とするオンライン対話型プロジェクト。2020年4月、コロナ禍における「生徒の気づきと学び」を最大化することを目指し、発足された。

とする校外の勉強会に参加するようになり、実感しました。オンライン授業の進め方など、コロナ禍という想定外の状況下での疑問や悩みをいろいろな先生方に打ち明けたところ、たくさんの方がアドバイスをくださり、連携の手を差し伸べてくれました。大変な時ほど、問題を1人で抱え込んではいけないということを、同プロジェクトを通して学びました。

三浦 想定外の状況は、教師のあり方を大きく変えます。2011年の東日本大震災では、創造的復興の実現に向けて、学校現場でも、対話を通して新たな価値の創出の重要性が認識され、そのための手法を教師は積極的に学ぶようになりました。その成果は、新学習指導要領で目指している「主体的・対話的で深い学び」の実現にも確実につながっていると思います。では、コロナ禍は、お二人の先生の学びにどのような影響を与えたのでしょうか。

佐々木 臨時休業は大きな困難でしたが、外部のオンラインの研究会などに参加することで、異業種

の方を含む校外のつながりが豊かになりましたし、校内でも、オンラインで研修の機会をつくり、同僚と学び合っていました。そうした経験は、本校の探究学習の土台の一部になっています。教師が学び続け、社会の様々な変化に対応できないと、その時代に必要な教育を展開することができないというところに、このコロナ禍の中で気づくことができたと思います。

佐藤 今まであたり前だったものが失われ、教育とは何か、学校とは何か、教師はどのような存在であるべきかを、改めて考えるきっかけになりました。学校行事や部活動などの制限により、生徒も教師も、思うような学校生活を送れないことは今でもあります。その中でも、どうすれば多くの学びや気づきを得られるのかを考え、今まで以上に、生徒と、そして同僚の先生たちと真剣に向き合うようになったと思います。ピンチはあったけれども、成長や転換という点では、チャンスでもあったのだと思っています。

学び続ける教師が、 学び続ける生徒を育てる

三浦 校内外の人たちとつながり、学びを広げる様子は、「越境する学び」そのものだと思います。一方で、日々、生徒に向き合わなければならぬ教師という仕事では、ほかの職種のように、一時的に現業を離れて他業種などで学び直すリカレント教育は、容易には実現しません。だからこそ、これからの教育活動において必要とされるスキルを獲得していく「リスキリング」が重要だと思うのです。お二人の先生も、多忙中でも知識をバージョンアップし、経験を積み続けるために心がけていることがあるのではないのでしょうか。

佐々木 本校の先生方の机は、基本的に職員室にあるのですが、私も含め、進路室常駐の先生方は、職員室に机がなく、職員室に机がある先生方とのコミュニケーションが不足しがちです。そのため、内線通話などで済む話でも、実際に職員室に足を運び、顔を合わせて対話することを心がけていま

す。ちょっとしたことですが、同僚間で学びを促す行為と言えるかもしれません。

佐藤 私は、「ただ聴く」ということも大切にしています。教師同士でアドバイスをし合ったり、意見を言い合ったりすることは大切です。ただ、アドバイスや意見には、必ず評価が伴います。そこで、相手を評価せず、ただ相手の話を受け入れる時間をつくることで、安心・安全な場が生まれ、互いにエネルギーを与え合い、仲間とともに学んでいこうという気持ちが高まるのではないのでしょうか。

三浦 先生方が学校とともに学び合い、成長実感を持つことは、生徒にも必ずよい影響を与えます。私がかつて勤務した学校で1人1台端末の活用を進めた時、生徒の表情がよい方向に変わっていったのは、端末の力だけではなく、新しいスキルを身につけようと頑張る教師の本気を、生徒が感じ取ったからだと思います。学びの相互作用が、教師、生徒という立場の違いを超えて連鎖する場を、今後もつくっていききたいですね。